

秀賞

つらくたっていいんだよ

秋田県大潟村立大潟中学校

3年 大山 心花

「手術が必要ですね。」

中学2年生の私は、医師にそう伝えられた。まあ、誰でもこんな感情を含めない言い方で手術を告げられると、一瞬戸惑ったり、人ごとのように思えたりしてどんな言葉を選ぶべきか分からなくなってしまうのではないだろうか。ふと我に返った私はこう自分に言い聞かせた。そんな重くて大変な病気なんかじゃない。ただの、「側弯症」である。人より背骨が曲がってしまっているだけであり、確率としては、子ども百人のうち一人から二人がなってしまう、思春期の時期に多くなるという珍しくもなんともないものである。背中が少し腫れて痛みを感じたから診てもらい、その結果がこれだったということだけだ。今までとは、何も変わらない。変わる必要もない。絶対に病人面してはいけない。いつも通りの日々を、変わらない自分を過ごしてきたつもりだったが、どうしようもないときはきてしまう。

「明日、病院に行くので休みます。」

月いちのペースで通院しなくてはならないので私は、月に1回これを言わないといけない。学校に伝えなければならないのは当然なのだが、休むことを伝えることはつらかった。他の人にとってはそれほど気にならないことなのかもしれないが、私にとっては、大して重くもない病気なのに、病人面して、欠席をするのは本当にいたたまれなかった。世の中もっと大変な病気をしている人がいるのに、「そんなことかよ」と思われていそうで怖かった。医師が定期検査する必要があると判断したのだから、堂々としていればいいのだが、周りがどう思うかが気になって仕方がなかった。だから学校をさぼっていると思われないうようにするため、検査に間に合うぎりぎりまで学校に居て、それから早退するようにしていた。

そうしているうちに夏休みに入り、1回目の手術をした。1回目は、側弯の手術を成功させるために必要なキアリ奇形の脳の近くの骨を削る手術である。手術は夏休み中であったため、あまり困ったことはなかったが、最も大事な側弯症の手術はそんなに思うようにいかなかった。

春休みに入り、2回目の手術をした。今回は、背中を切って骨を真っすぐに戻すという手術だった。手術は無事成功したが、問題はここからだった。3カ月間、運動や前かがみになる姿勢の禁止が告げられた。春休み明けにはクッシ

ョンを手にとって、キャリーケースを引っ張って学校に行った。もう嫌で仕方がなかった。一人だけ周囲から浮いている感じで、明らかに何かがあったような雰囲気を出していて、いかにも病人ですという見た目であった。そうして、不自由なまま学校生活を送っていた。物を持ってはいけない私は、クラスの誰かに椅子を上げてもらったり、運んでもらったり、どうしても背中が痛くなったら、保健室で休んだりと周りの迷惑になるようなことばかりしていた。誰かの助けがないと何もできない自分を悲しく思っていた。ある日、掃除をしていて、モップのシートを替えようとしているとき、いつも話を聞いてくれていた養護の先生にこう言われた。

「無理しないで、できないときは『やって』とお願いするものだよ。」と。この瞬間、ハッとした。できないことを認めて、できることにしっかり取り組めばいいだけなのだと気付いた。周りと比べることなど、意味がない。自分がつらい、大変だと思ったら誰かに頼ってもいいのだと、自信をもって思えた。

その後、私は皆に感謝を伝えられそうな場面、自分の力で手伝えることができる場面を見つけては積極的に行動することを心掛けた。例えば、修学旅行の自主研修中、班の仲間が待っていてくれたこと、集会でいつも私の椅子を運んでくれる人がいることなどを生活記録ノートに記し、担任の先生に知ってもらうようにした。つまらないプライドは捨てて、素直な気持ちでお願いする中で、友達のよさや優しさを身にしみて感じるようになった。

そうして、そういう人たちに囲まれて今を生きている自分を幸せだと思ったし、人の好意を喜んで受け入れる自分を以前より好きになった気がした。

未来の自分へ。

私は生まれつきの病気で、他の人が味わったことがないような苦痛を経験し、強がってはみたものの、心が折れてしまったことがあるよ。そんなに強くないんだ、私は。でもね、私の周りにはさり気ない優しさで、私を気遣ってくれる人がいる。弱い自分をさらけ出しても受け止めてくれる人がいる。

未来の私はもう大丈夫だよ。そして、つらそうにしている人、苦しんでいる人がいたら「一人で抱え込まないで。誰かに頼ったっていいんだよ。」と言ってあげてね。